マサイ族の部落・その二(写真集)

サバンナで実際生活しているマサイの人たちの写真をもう少し紹介しておきたい。なかなか簡単に経験できることではない。

マサイの男達:



(写真 98,99) 近くに寄るとそれぞれ顔つきは違う。 この人たちがウイリアム、ジョージ、ダンカン、エドワードと 呼び合っているのは微笑ましい。親から貰った名前なのか自称 なのか?聞いていないので解らない。

















(写真 100~106 前頁)顔写真を載せたが顔を見ただけでは年齢はわからない。子供とその前が若者とわかるくらいだ。皆、顔のつやが良い。市販の化粧品を使っているわけはない。

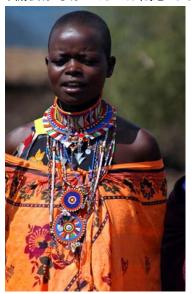
マサイの女性とファッション:





(写真 107,108)女性の衣装はカラフルでそれぞれ違う。我々を歓迎した衣装だろう。普段からこの様な衣装と飾りを着けているとは思えない。女性たちの名前は何と呼ぶのだろう。マーガレット、エリザベスなどと呼び合っているとすれば楽しい。女性の名前を聞く機会がなかったのは残念であった。







(写真 109~112)マサイのファッションショー。

それぞれ、個性的で面白い。何を基準に衣装やアクセサリーを選んでいるのだろうか?既婚と未婚で違いがあるのか、家毎に違っているのか?

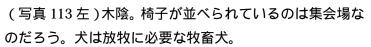


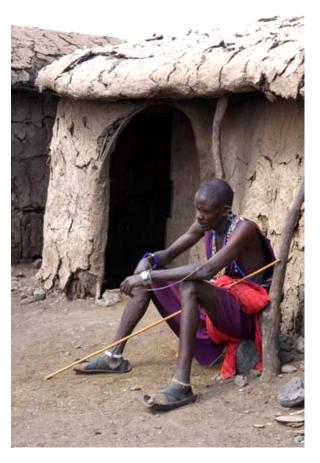
サバンナに咲いていた小さな花

部落内のスナップ:



(写真114右)軒先で休む青年。

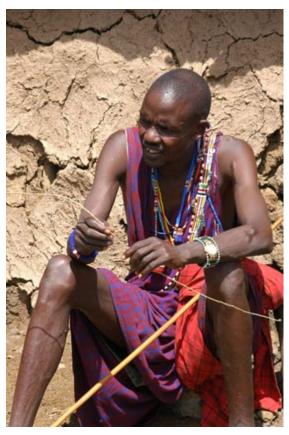




(写真115左)軒先でおしゃべりしている婦人達。







(写真 116,117) 子供たちと話をしてい る大人のマサイ。左。

軒先で糸を撚っていた 青年マサイ。右。

象の研究をしている日本女性

その日の夕方もゲームドライブをする。今まで見た動物と種類は変わらない。猫科の猛獣は最後まで、 我々の前に現れなかった。

ただキリマンジェロの赤く染まった夕景や木に止まった大型鳥類の鷲の姿を確認できたのは収穫だった。

3回目のゲームドライブを終えてホテルに帰り、ホールに集まる。わざわざ、我々のために車で7時間もかけて来てくれているアフリカに暮らしながらフィールドワークをしている、日本女性の中村さんの講演を聞いた。

彼女は30代後半で、国立公園の研究施設に住んでアフリカ象の研究をしている。しかも研究課題としているのは、アフリカ象と人間社会の関係ということで、マサイ族の居るところに出かけていっては交流を重ねている。もう3年くらい、こちらで生活していて、年に1回くらいしか日本に帰らない人である。

彼女の話によると、以前はこのサバンナで遊牧生活をしているマサイの人々と野生動物はちゃんとした住み分けが出来ていて、アフリカ象に対してもある種の親しみを持っていた。ところが、最近は憎しみを持つようになってきている。

それは保護政策で象をはじめ、動物類の数は増えているが、野生動物の食料は減る一方である。木は無くなるし、草も過放牧で少ない。そうなって来ると、人間の居住区に侵略し、放牧中の牛や人間が襲われ、食料が奪われる。特にアフリカ象は気が荒いといわれている。

そこでアフリカ象の行動を観察することで、人間社会との関係をうまくもっていく方策を検討するのが彼女の課題にしているのだが、昔ながらの牛に依存した遊牧生活しか出来ないマサイの人々をどう生活改善して順応させるかも大きな課題にしているという。

野生動物の保護とその食料事情、それに周辺住民の生活の問題は日本でもある。

神奈川県の丹沢山塊では野生の鹿が増えすぎて、山頂近くの森林は丸裸になってしまい、里の野菜畑が 荒らされるようになってしまっている。山裾に柵をもうけて山から下りてこないようにしているが、莫 大な費用がかかるし、完全なものではない。

アフリカではもともと豊かな場所ではない。そこで食料や富を奪い合っているのだから争いごとは多く発生する。日本女性がアフリカに住んで、フィールドワークしていることに驚きと、頼もしさを覚えた。

いよいよ帰国

翌朝は日の出る前に起きて帰路につく。夕方のナイロビ発で来たときと同じドバイ経由で帰国する予定になっている。途中、ナイロビ近郷のレストランで野生動物の肉の料理を食べる。いかにも観光客相手の店で、鰐の肉をはじめ、いろんな動物の料理を出してくれたが、珍しさだけで、あまりおいしいとは思えなかった。

もう何日もダンカンの車で移動して、親しく会話が出来るようになっている。

「ケニアの平均寿命は何歳ですか?」と聞いた人がいた。ダンカンの答えは「48 歳です。でも私のお母さんは 90 歳近くですが元気ですよ。日本人は何歳ですか?」

という。一応現在の日本人の平均寿命を男女別で答えておいて、はっとした。

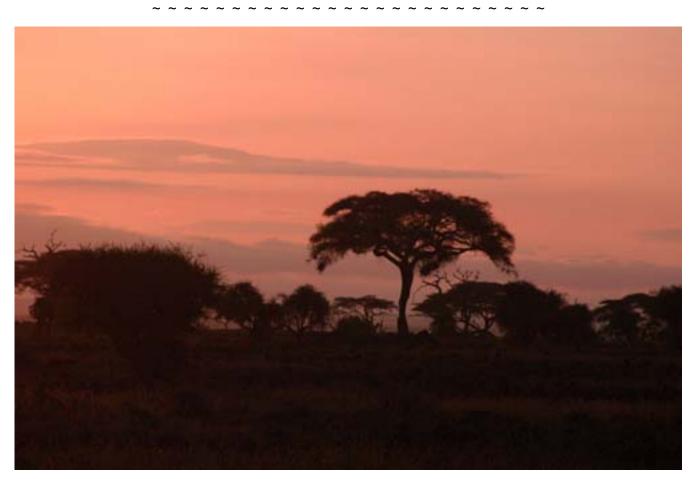
平均年齢はあくまでも総人口で平均しただけのことである。ケニアの 48 歳は短いと思うかもしれない。しかし、ここは乳幼児や子供の死亡率が圧倒的に多い。それが組み込まれているから低いのだ、生き延びた成人は結構長寿のひとが多くいるのだろう。それに加えて、日本の場合には子供の数が少ない、しかも文明社会のお陰で、病気でも中々死なない。元気寿命ははたして日本とケニアでどのくらいなのかと思ってしまう。はたして、すべてを平均した寿命が長いと日本人は誇っていいのか、喜んでいいのかと。

あとがき

今回のケニアでの植樹はいそがしいスケジュールであった。時間があれば訪れてみたいところは数多くある。国立公園に二つしかいかなかったが、有名なものがもう二つある。マサイマラ国立公園に行けば、おそらく猫科のライオンやジャガーを身近に見られるし、ナクル国立公園に行けばフラミンゴをすぐ間近で見られるだろう。

また、観光客の入らない国立公園や保護区ではもっとアフリカらしい物も見られ、体感出来るだろう。 いずれ機会があれば自分が植えた樹がどう育っているか見に再度訪れてみたいとおもっている。それ だけ魅力のある場所であった。またアフリカ大陸に範囲を広げればニジェール川流域の熱帯雨林を見た いと思っている。ボルネオや中央アメリカの熱帯雨林は見ているが、アフリカ大陸のそれはまだ見てい ない。

(キリマンジャロの雪・完)



(写真118)アフリカの夕べ。